

教育

きらめく成長物語 一緒に楽しむ

学びの交差点



武蔵野東第一・第二幼稚園園長

加藤 篤彦さん(63)

7月初旬、東京都武蔵野市の幼稚園。10人ほどの年長の子もたちが机に向かい、傘の絵にカラフルな色を塗っていた。少人数クラスで過ごす自閉スペクトラム症の子もたち。中でも特に熱心に色を塗っている女の子がいた。「この子にもいろんなドラマがあったんですよ」。加藤篤彦さん(63)はそう話し、昔の動画や写真を見せてくれた。

加藤さんが園長を務める武蔵野東第一・第二幼稚園は、自閉症の子もそうでない子もともに学ぶ「混合教育」を掲げている。今年4月時点で、2園の園児計488人のうち、自閉症の子は66人へのぼる。

も関わろうとしない。そんな女の子に教職員は根気強く声をかけ続け、周りの子どもたちも遊びに誘った。すると女の子は徐々にクラスでの活動に参加するようになり、笑顔を見せるようになった……。

武蔵野東幼稚園では、自閉症の子は、それ以外の子とは別の少人数クラスに入る。両者を分け隔てているのではないかと指摘されることもあったが、加藤さんは「しっかりとした目的がある」と話す。

「子どもの心には安心できる『快適空間』があり、その外側にチャレンジする『背伸び空間』、さらにその外側にパニックになる『混乱空間』がある。自閉症の子をいきなり通常クラスに入れると、チャレンジ



自閉症の子のための少人数クラスでは、写真やイラストをふんだんに使い、「あさのあつまり」や「おんがく」などの活動に参加するよう促していく。

いずれも東京都武蔵野市、伊ヶ崎忍撮影

自閉症の子も そうでない子も ともに学ぶ多様性

どころかパニックになる恐れがある。まずは安心できる環境を整え、少しずつできることを増やしてもらおうとしています。武蔵野東幼稚園では、自閉症の子は状況に応じ、通常クラスへ通級する。朝の集まりや昼食などに参加する機会を徐々に増やし、中には週数日と限定的ながら、一日すべてを通常クラスで過ごす子もいる。

行事も重要だ。運動会では混合チームを組む。自閉症の子をサポートすればは勝てるのか、子どもたちは真剣に考える。「多様な人たちが目的を達成する」という点で、社会人に必要な能力と共通する。競争の結果ではなく、過程が学びの時間なんです」と加藤さんは話す。

園のメッセージは保護者の研究會などで混合教育の重要性を訴えてきた。この冬、自閉症ではない園児の保護者に入園の理由を尋ねたところ、ほとんどが多様な性を尊重する学びができるからと答えた。自閉症の子の保護者からは、園での取り組みを通して子どもへの思いも見える目が変わったという声も寄せられている。

しごとの相棒

スマホで撮影 保護者と共有

自閉症の子の成長には、幼稚園と保護者の情報共有が欠かせない。子どもたちを撮影し、アプリで成長の様子を伝えられるスマートフォンは、加藤さんにとって欠かせない相棒だ。



取材後記

ともに生きる社会 伝えたい

子どもの声に耳を澄まし、様子を見ながら少しの背伸びを促す。武蔵野東幼稚園が自閉症の子の教育で大切にしていることは、一般的な子育てにも示唆に富む。同園によると、通常クラスの子も自閉症の子との交流を通じて成長しているという。学び合い、高め合う関係づくりを、未就学児が実践している。

9年前の入社して間もない頃、知的・発達障害の子のインクルーシブ教育を進める団体の記事を書いた。団体の人はこう話していた。「障害のある子どもも、社会に出て働き始めたらともに生きていかなければならない」。これからも、ともに生きられる社会の実現のための取り組みを伝えていきたい。